

群青は別名「ウルトラマリン」と呼ばれる。本来はラピスラズリ(瑠璃)を原料とする青色顔料のことである。ラピスはラテン語で「石」、ラズリはペルシャ語のラズワルド(天・空・青などの意)で、「群青の空の色」を意味しているという。ラピスラズリの主鉱物はラズライト。ヨーロッパへはアフガニスタンから西アジアを経てもたらされた。大変に高価な品であり、純金と等価もしくはそれ以上の価値で流通していた。フェルメールの絵画において特徴的な色彩であるため、フェルメールブルーとも、最上の青として聖母マリアにささげられたため、マドンナブルーとも呼ばれた。
ウルトラマリンという名前は海



やまもと たろう
山本 太郎

海を越えた「青と碧」

(marine)を越えてきた(uetra)という意味である。この場合の海とは地中海をさす。和名の群青は「青の集まり」とい

う意味である。海を越えてきた「青」といえば、「碧(あお)」を思い出す。

昭和18年12月、ドイツから送られてきた医学雑誌中のペニシリンに関連した記事があった。戦時中で欧米と情報の断絶にあった日本のペニシリン開発は、この1冊の雑誌に始まった。昭和19年1月27日朝日新聞は、アルゼンチン(当時、中立国)ブエノスアイレス発と

してペニシリンの存在を書き送った。このブエノスアイレス発の記事は、アルゼンチンがその後、参戦したために最後の打電となった。

記事の最後には、それを予想したように「さよなら」の一語がある。昭和20年5月には粗製とはいえ日本初のペニシリンは臨床応用可能となった。「碧素(へきそ)」という名は、ペニシリンの日本語名として公募されたなかから選ばれた。当時の第一高等学校生徒が名付け親だった「碧素 日本ペニシリン物語(角田房子)」。これもまた、海を越えてきた「碧」といえるかもしれない。しかしそれは悲しい物語でもあった。昭和18年10月には雨の神宮外苑がいえんで学徒出陣の壮行会が行われ、ペニシリンに「碧素」という名が付けられた頃、その年齢がさらに1歳引き下げられた。そうした時代であった。

(長崎大熱帯医学研究所教授)